

# ピアノ初心者のレッスンにおける教則本の比較

## Comparison of the Practice Books in Piano Lessons for Beginners

中村 礼香  
Ayaka Nakamura

鹿児島女子短期大学

ピアノの初心者にはバイエル・ピアノ教則本を使用するという固定概念が日本にはある。実際、本学でもバイエルを使用している。しかし、現在は百種類以上の教則本が出版されている中で、何か本学のレッスンのやり方に適した教則本がないか検討してみたいと考えた。そこで、教則本と、教則本の併用曲集を何冊か選び、その内容を精査し、本学に適したピアノ教則本を見つけないか比較研究を行った。特に調性や強弱記号等に特化して比較を行い、各教則本の長所短所を抽出した。

キーワード：ピアノ初心者、教則本、バイエル

### 1. はじめに

保育者養成校において、初心者のピアノ教則本は「バイエル・ピアノ教則本」が使用されることが多い。これはクラシック曲や幼児曲の楽譜のレベルを分ける際にも「バイエル〇番程度」と記載されていることがほとんどである。また県によっては幼稚園・保育所の採用試験、小学校の採用試験において「バイエル〇番」というピアノの課題曲が与えられることがあり、日本のピアノ教育においてバイエルが基準となっていることが理由の一つと考えられる。宮脇(2001)が全国の保育者養成校に質問紙調査を行い123校からデータが集まった結果、61校の54%がバイエルを使用しているという結果が出ている。教え切れないほどピアノ教則本が出版されている今日、バイエルの使用率が50%を超えていることは驚異的なことである。しかし、多田(2010)によると、欧米におけるバイエルに関する先行研究は少なく、ドイツの辞書などにもその名前が見られないことから、「バイエル」の浸透が我が国特有のように言われることが多い。

本学もバイエルを使用している養成校の1つである。本学では、平成26年度より全国大学音楽教育学会九州地区学会編の「ピアノテキスト」を使用している。このテキストの中にはバイエル106曲の中からの抜粋された19曲や、幼児曲の伴奏付け法、音楽理論等がまとめられており、1冊で様々な音楽教育に関わる勉強が出来るようになっている。しかし、バイエル106曲中19曲だけでは少ないという声がピアノ教員たちの中から上がり、本学では別途バイエル・ピアノ教則本を学生に購入させ、バイエルを31曲程度抽出して弾かせるようにした。この形態を取りだしてから1年程であるが、バイエルを重複して学生に購入させることが

本当にいいのか、これだけたくさんの教則本が出版されているのなら、せつかくバイエルは「ピアノテキスト」の中で出てくるので他の教則本と併用させることはできないのかという疑問が筆者の中で起こった。鹿児島県の小学校採用試験においても、幼稚園・保育所の採用試験においてもバイエルを指定されるということを知ることがない。そのため、バイエルをする必要性はないと考えられる。筆者を始め多くのピアノ教師の世代が最初にピアノに触れた教則本がバイエルということもあり、バイエルに慣れ親しんでいることからバイエルを選択することが多かったが、時代に即応した教則本があるのではないかと考え、本学のピアノ教育の理念に合った教則本があるのではないかと考え、教則本を比較検討し、今後の本学におけるピアノ教育にあった教則本を探求したく研究することにした。

### 2. 研究の目的と方法

バイエル・ピアノ教則本は百年以上日本で定着している初心者のための教則本である。しかし、これを使ったから音楽性が身につくというわけではない。あくまで指の運動の基礎を学ぶための教則本である。本学のピアノのレッスンでは2年間という短い時間でピアノの基礎から音楽性まで身につけさせ、幼児曲を楽しく弾くことができるようにすることを最終目的として教えている。特にピアノの教則本を使った基礎的なことは1年生のときしかレッスンを行わず、2年生になると幼児曲を中心にレッスンを行っている。そこで、1年目にいかに基礎力を付けることができる教則本があるのか、どのような教則本が存在するのかということを筆者自身が知らないため、教則本を比較検討し、来年度から新しく採用することができる教則本がないか探

求することをこの研究の目的とする。

比較研究の教材として選択したのは以下のものである。バイエル・ピアノ教則本と比較されることの多い教則本である「バスティン・ピアノメソッド」「バーナム ピアノテクニック」「メトドローズ・ピアノ教則本」「トンプソン現代ピアノ教本」「アルフレッド・ピアノライブラリー」「グローバー・ピアノ教本」。また、教則本併用曲集といわれるものから「グルリット 初歩者のための小練習曲」「バイエル併用 ピアノのお友だち 新訂①」「リトルコスモス」「わたしはピアニスト」である。教則本併用曲集にこの4冊を選択した理由としては、大人でも使いやすい曲集であること、有名な曲が多く掲載されており知っている曲を弾くことで学生が楽しんで練習をすることができるのではないかと考えたことである。まずはこれらの教則本の歴史、特徴などを文献などにより調査する。その後、各教材の調性、拍子、強弱記号などの曲想に関する記号の有無などを比較する。

ただし、これらの教則本の多くは1つの曲集が何巻にも分かれているため、複数に分かれている教則本や教則本併用曲集は全て初級である1巻のみを比較する。

### 3. 各教則本について

#### (1) バイエル・ピアノ教則本

バイエルについては、多くの先行研究がなされている。その中でも安田寛による「バイエルの謎 日本文化になったピアノ教則本」(2012)を参考にまとめる。

バイエル・ピアノ教則本はフェルディナント・バイエル(Ferdinand Beyer 1803-1863)によって書かれ、1880(明治13)年にアメリカのルーサー・ホワイトティング・メーソン(Luther Whitig Mason 1818-1896)が音楽取調掛で使う教科書として日本にもたらしたと言われている。ピアノ自体は、1820年代に日本にフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold 1796-1866)によってもたらされた。山口県萩市の熊谷美術館にはシーボルトより贈られた日本最古のピアノが現存する。日本で最初にピアノを教えた松野クララはリチャードソンのピアノ教則本を使い、1872(明治5)年にアメリカに留学し音楽を学んで音楽取調掛でピアノを教えていた瓜生繁はウルバッハのピアノ教則本を使用していたので、教則本に選択肢がなかったわけではないのに、なぜバイエル・ピアノ教則本だけが流行ったのだろうか。バイエル・ピアノ教則本をもたらしたと言われるメーソンはバイオリンが専門であり、ピアノに関しての知識はなく、ピアノについての相談相手だったステファン・アルバート・エメリー(Stephen Albert Emery 生没年不詳)がバイエル・ピアノ教則本をメーソンに日本に持って行くよう薦めた。そのとき、バイ

エルを20冊、ピアノとピアノ椅子を1台ずつ、そして、ツェルニーやクレメンティー、エメリースなど全部で15種類、78冊の教則本が日本に入ってきている。そのときにそこから100年近くバイエル・ピアノ教則本が主流となっていたが、1980年代に本場のドイツではバイエルを使っていない、バイエルという名前すら知られていない、時代遅れであるということを経験して生まれハンガリーで勉強したピアニスト、ロナルド・カヴァイエがバイエル批判を行い、ここからバイエル・ピアノ教則本が批判されるようになったようである。そのようなバイエル・ピアノ教則本がなぜ日本でブームとなったのであろうか。

バイエルの特徴は、左手が典型的な伴奏型の曲が多いため、バイエルを勉強してきた人たちが伴奏付けを行う際に同じような伴奏の形で弾いてしまう可能性がある。また60番までは両手共にト音記号しか出てこず、61番から左手がヘ音記号になる。69番まではハ長調で、70番になって初めてト長調が出てくる。106番までであるうちの78.3%の曲はハ長調なのである。またフラット1つのヘ長調が出てくるのは94番以降である。幼児曲はト長調、ヘ長調の曲が最も多く、シャープやフラットに早くから慣れていないと弾き難い。できれば早い段階からハ長調以外の曲に触れることができる機会がほしい。ただし、そのような要望は保育者養成校だから起こることで、幼児期の教育とはまた異なる。そのようなことを幼児向けの教則本に求めることが間違いであり、根本的に保育者養成校用に作り替える必要があるのかもしれない。

最初に音楽取調掛の生徒がバイエルを使い、日本全国に定着させたのは奥好義であった。彼はピアノを松野クララに習い、後にメーソンにも習った。奥は1890(明治23)年にバイエル・ピアノ教則本を改編し、「洋琴教則本」として出版した。これは、バイエルをかなり簡略化したものである。そして大正時代に、バイエルのペーターズ版を翻訳しようという動きが出て、1915(大正4)年に日本最初の「バイエル教則本」が発行された。この流れは現在まで続いていて「標準バイエル教則本」と命名されている。バイエルが戦後高度成長期のピアノ普及時に爆発的ブームとなった背景には4人のピアノ教育者の先駆的業績があるようである。その4人とは園田清秀、一宮道子、田中スミ、酒田富治である。日本のバイエルとしては、「子どものバイエル」という上下巻に分かれたものが有名である。戦後間もない1947(昭和22)年に一宮道子が編纂した「子どものバイエル」が「一宮バイエル」として長く親しまれた。このバイエルのページ数はバイエル初版と比べて異常に多いようである。バイエル初版は67ページに対して、一宮バイエルは上下合わせて392ページにもなっている。その理由として子ども用に音符を大きくしたこと、日本用に編纂し

たことで初版をかなり拡張したことが挙げられる。一宮は、音感教育の創始者として知られる園田清秀が編集した「新しいバイエル」をさらに再編集したと考えられている。園田がバイエルの改編を決定的に推し進めた最初の人物であり、1936（昭和11）年に日本独特のバイエルである「新しいバイエル」上下巻を作成した。園田はバイエルの原本をそのまま使うと、いろいろな点で不便があり、欠点があると述べ、改良したのである。その「新しいバイエル」を戦後に復活させたのが一宮道子と田中スミである。田中スミも音感教育を行い、現在でも使われている「色音符」で一世を風靡した。田中スミは「いろおんぶばいえる」を作成し、元のバイエルの曲順を変更したり、曲に歌詞を付け、また音符に色を付けた楽譜を作成した。一宮道子、田中スミによって受け継がれた園田バイエルは、さらに酒田富治によって完全に体系化された。酒田は、「バイエルに入るまで」という楽譜を5巻作成した。園田も一宮もバイエルの初版を拡張していたが、酒田は、さらにバイエル初版に「バイエルに入るまで5巻」を挿入し、もともとバイエル2巻にたどり着くまで6ページだったものが241ページまで拡張したのである。このように、初版のバイエルに日本独自のものが4人の音楽家によって挿入され、バイエルが上下2巻にわかれるまでに至った。ここまで教則本の初版に手を入れたものはないのではないだろうか。音感教育の創始者である園田、「お弁当」など幼稚園・保育所で毎日歌われる多くの曲を作曲した一宮、いろおんぶの創始者である田中など、著名な音楽教育家たちが手をここまで入れたからこそ、バイエルが日本で爆発的にブームとなり、現在まで使用され、すべてにおいての基準となっているのかもしれない。

## （2）バスティン・ピアノメソッド

バスティン・メソッドはアメリカのピアニストであり、作曲家、ピアノ教育者であるジェーン・バスティン（Jane Smisor Bastien 生年不詳）とジェームス・バスティン（James Bastien 1934-2005）夫妻によって1960年代より創始・開発された。この初心者のための教則本は、4歳の子どもから成人のコースまであり、総冊数は100冊を超える。バスティン・メソッドの最大の特徴は、全調メソッド（multi key method）であるということである。各調でポジションをマスターすれば、移調を簡単にできるようになる。また、バスティン・メソッドでは楽典の勉強も出来るようになっていく。例えばレベルが一番高い、レベル4の教則本になると、変ト長調も勉強できる（図1）。この調までは幼児曲を弾く上で必要はないが、フラットやシャープが3つぐらいまでは勉強したいところであり、この基礎を知った上でその調の曲が4曲ぐらい出てくるため、

その調に慣れることができるという利点がある。

バスティン・メソッドは大きく3つに区分されている。これに関しては、田中ら（2009）の「バスティン・ピアノメソッドに見られるラーニング・スパイラルに関する一考察」から抜粋する。

### ①教則本シリーズ

バスティン教材の中核となる教則本である。これは、「ピアノパーティー」、「ピアノベーシックス」などが年齢別に、また段階別に何冊にも分かれている。「ピアノパーティー」は4歳からピアノ学習を始める子どもたちのために作られた教則本である。「ピアノベーシックス」は7歳からピアノ学習を始める子どもたちのために作られた教則本である。バスティン・ピアノベーシックスは4冊の教本を1セットとして、プリマーからレベル4までの5段階で11歳までに行うものである。その4冊とは、ピアノのテクニックと読譜に関わる基本的な内容を学習する「ピアノ」、「ピアノ」において体得した経験を知識として捉え直す「セオリー」、知識によって整えられた経験を応用する「パフォーマンス」、体得した演奏技法を意識化させる「テクニック」である。

### ②併用曲集

バスティン夫妻と長女リサ・バスティン（Lisa Bastien）、次女ローリー・バスティン（Lori Bastien）によって作曲、編曲された、導入から中級の各レベルを網羅するオリジナルの曲や、ディズニー、クラシック、ロックなどを編曲した物などがあり、発表会用としても使用される。

### ③ピアノ名曲集

クラシック曲を初級から中級までレベル別に編集した曲集である。編曲はされておらず、各レベルごとにバロック、クラシック、ロマン、近現代の4期にわたる作品が収録されている。

もし本学で初心者用として使用するならば、①の教則本シリーズになると思われるが、楽譜を見る限り挿絵が多く、音符がかなり大きく、小さい子ども向けに作られたことが分かる（図2）。また薄い本が何冊にも分かれているため、これを本学に導入した場合、学生にたくさんの教材を買わせてしまうことになりかねない。そして何より5年間で使用することを前提とされているため、短期大学の2年間、できれば基礎力をつけたい1年目ですべてを終わらせることに無理がある。教則本シリーズの中から適当と思われるものをこちらが抽出して新しい楽譜として1冊にまとめることができればいいのかもわからないが、そのまま使用するには学生たちのピアノの学習には合わないと感じた。先述のように、全調メソッドのため、バスティン・ピアノメソ



ドを使用すると学生たちが移調を簡単に行うことができるようになるかもしれない。幼児曲の楽譜で、子どもの音域に合っていない譜面が載っていることがある。例えば「しゃぼん玉」は変ホ長調だと高いミのフラットが出てくるため、ハ長調に移調することができれば子どもにとって歌いやすくなる。それを言葉と筆者の演奏にて伝えるが、実際に全員の学生に実践させることはなかなかない。こういったことが教則本を使用することで理解させることができることが望ましい。そして、バスティンについて調べていく中で、大人のための教則本が2冊出ていることがわかった。しかし、値段的にバイエルの4倍近くするため学生に薦めにくい。この大人用のバスティンの内容を検証して、もし全調メソッドなどが取り入れられているようであれば、使用も検討したい。

38

G<sup>b</sup> メジャー(変ト長調) 長音階

はじめは 片手ずつ ひきましよう。

G<sup>b</sup> メジャー 主要三和音(変ト長調)

主和音 (トニック) G<sup>b</sup>      下属和音 (サブドミナント) C<sup>b</sup>      属七の和音 (ドミナントセブンス) D<sup>b</sup>7

(変ト長調)

G<sup>b</sup> メジャーの 和音進行を 練習しましょう。  
はじめは 片手ずつ ひきましよう。

第2練習曲      第1練習曲

WP204J

図1. バスティンピアノベーシック ピアノ (ピアノのおけいこ) レベル4 p.38より

7

★ 次の曲には程度の音程が変われていますか。

Roaring Lions  
ほえるライオン

Moderately (ちゅうぐらいのはやさで)

1. ほえる ライオン どうぶつのおおさまよ  
2. そばに よるな かみつかれるよ

図2. バスティンピアノベーシック ピアノ (ピアノのおけいこ) レベル1 p.7より

(3) バーナム ピアノ テクニック

この教則本はアメリカのエドナ・メイ・バーナム (Edna Mae Burnam 1907-2007) によって書かれ、中村菊子氏によって翻訳され、1975年に日本に導入された。まえがきによると、この本の目的は、強い手と柔軟性のある指を作ることである。「毎身体操する人がいるように、毎日ピアノの練習をする前に指の体操をしてみましょう。まず2つ、3つから練習を始め、少しずつ弾く曲の数を増やします。」<sup>1)</sup>といったことが書かれていることから、指の練習のために書かれたものであり、基本的なテクニックを習得する教則本だと言える。この教則本は、幼児のための「ミニブック」と「導入書」それに高度なレベルに達する4巻を加えた全6巻からできており、子どもの音楽性を豊かにすることに重点をおいてかかれたテクニックの本である。どの練習も一つひとつが体操や運動に例えられていて、子どもの動作を描いた挿絵と一緒に、スケール、アルペジオ、和音、オクターブ、半音階、装飾音、トリルなどの練習が繰り返しながら各巻に紹介されている。深呼吸、屈伸、片足跳び、側転運動など子どもたちがイメージしやすい絵が描かれ、それに合った音楽を弾かせることで子どもたちの想像力をかき立てる(図3)。また、導入書では最初からへ音記号が出てくる。これは他の教則本と比べると珍しい。バイエル・ピアノ教則本は106曲中、60番まで左手がト音記号で書かれており、へ音記号に慣れるまでに時間がかかる。それに比べると、最初からへ音記号が出てくる教則本が短期大学の教育には望ましい。

しかしこの教則本シリーズの一番の問題点は全てがハ長調で書かれていることである。臨時記号は出てくるが、基本的にハ長調のため、1冊終わるごとに移調して弾くことが求められている。しかしこれは指導者によって移調をさせるかどうか異なってくるであろうし、他の調の調号を知る前に移調させることはできないので、移調の仕方から教える必要が出てくる。そのため、時間のある子どもたちのレッスンでは可能かもしれないが、2年間しか時間のな

い、しかも先述したように出来れば1年目で基礎を身につけさせたい本学のピアノレッスンには不向きだと思われる。ただ、指くぐり、装飾音符、和音などは早い段階で出てくる。このような技術は学生たちに身につけさせたいものである。この教材を転調させて譜面にしたり、曲を抽出したりすることで使用することが出来るかもしれない。



図3. パーナム ピアノ テクニック導入書 p.7より

#### (4) メトードローズ・ピアノ教則本

メトードローズ・ピアノ教則本はフランスのピアノ教師であり、作曲家、指揮者であったエルネスト・ヴァン・ド・ヴェルド (Ernest Van De Verde 生没年不詳) によって書かれた。1951年に安川加寿子氏によって日本に紹介された。当時はフランスではどんな人でもこのメトードを使っていたようである。「ピアノの一年生」という副題が付いており、エルネスト・ヴァン・ド・ヴェルドによると、子どもが本を読めるようになった満5・6歳頃音楽を教え始める方がよいと書かれている。

この教則本には通し番号が付いておらず、例えば「リズムの練習～続き合った音程～」「リズムの練習～続いている音程～」など細かく練習の過程が分かれており、第一課の7ページ目より左手にへ音記号が出てくる。バイエルなどと比べると早い段階で出てくるようだ。特徴としては指使いが細かく書いてあり、それぞれの課において、予備練習—練習曲—題名の付いた曲と系統だった進み方になっているため、何を目的とした練習かがわかりやすくなっている。

しかし、メトードローズでは、シャープやフラットの半音上がるなどの意味の説明はあっても、調性についてはあまり触れられていない。また、「指くぐり」といった親指を3の指の次に持ってくるなどの幅広い音域で弾かせる曲があまりなく、5の指までで収まる曲がほとんどである。レッスンでソナチネレベルを弾く学生であっても、運指の基本をこれまでに身につけておらず、指導者からは考えられない指使いをすることがある。そのため、指くぐりなどはしっかりと身につけさせたいところであり、その運指が少ないこの教材は本学の学生には適さないと考える。

#### (5) トンプソン 現代ピアノ教本

アメリカのジョン＝トンプソン (John Sylvanus Thompson 1889-1963) によって作成された教則本である。野崎照子によって訳され、1972年に大島正泰によって日本で出版された。まえがきによると、本書の目的はピアノを勉強するにあたって正確なしかも完全な基礎をつくり、生徒が音楽的に感じ、考えることが出来るようにすることにあり、単純なメロディーや小さなピアノ曲を弾くというレンガを積み重ねていくことで、大きな楽曲を組み立てられるようになることであると述べられている<sup>2)</sup>。この教本の第1巻では全曲5本の指の位置で弾ける物に限ってあるので弾きやすいと言えるが、すべての音に指番号が振られているため、その位置に指を置くと読譜をせずにピアノが弾けてしまうというデメリットが生じる。メトードローズ・ピアノ教則本でも述べたように幼児曲を弾きこなす上では指くぐりが必要な技術となり、5本の指だけで弾けることはデメリットでしかない。そしてこの教本も5巻まで存在する。各調の音階に関しては特に力を入れて扱っておらず、調に対する感性を身に付けにくいと思われる。例えば1巻の中でイ長調は1曲しか扱われておらず、ニ長調も同じく1曲のみである。また変ロ長調は扱われていないというように、幼児曲にとって知っておくべき調が1巻の中だけでは偏って扱われているため、体系的にピアノの基礎を学びにくいと考えられる。ただし、最初からへ音記号が出てくると、指の位置が写真と共に併記され、音楽の形式や表情記号の意味、フレーズの弾き方やピアノの鍵盤の押し方、リズムなど細かく文章と絵、写真で説明されているために初心者にとってとてもわかりやすくなっているところが他の教則本と比べると優れている点である (図4)。

#### (6) アルフレッド・ピアノライブラリー

アルフレッド・ピアノライブラリーは、W.A.パーマー/M.マニユス/A.V.レスコの3名によって書かれ、田村智子によって日本語に訳されている。アルフレッド・ピアノライブラリーは「導入コース」と「基礎コース」に分けられ、生徒のピアノのレベルによって使い分けられるようになっている。図に表すと以下のようなになる (図5)。導入コースはレベルがAからFまで6段階に分けられ、各レベルは教本、併用曲集、やさしい楽典、聴音と音楽ドリルの4冊に分かれており、基礎コースはレッスンブック、リサイタルブック、楽典の3冊に分かれている。導入コースは反復が含まれており、じっくり進みたい生徒向けであり、基礎コースは一般的な生徒用である。アルフレッド・ピアノライブラリーの特徴は、急に難しいことが出てこないことにある。新しく学習する内容が生徒に理解できる言葉で説明されているので、生徒は自分が学ぶべきことをしっ

かりと認識することができるようになってきている。例えば3和音の転回系や、調についても全調取り組めるようになってきている(図6)。また、付点のリズムについてなども細かく説明があり、生徒がわかりやすいようになってきている(図7)。ただし、最初の導入に関しては、レベル1Aにおいて、右手と左手が片手ずつから弾くようになっており、最初の30ページは五線譜がなく、音符の長さや指使いのみでピアノが弾けるようになってきている。50ページより両手で弾く曲が出てくる。これもどのレベルから入らせるべきなのか学生によって選択しなければならないことと、冊数が分かれすぎているところが問題となり、本学への導入は難しいと考えられる。

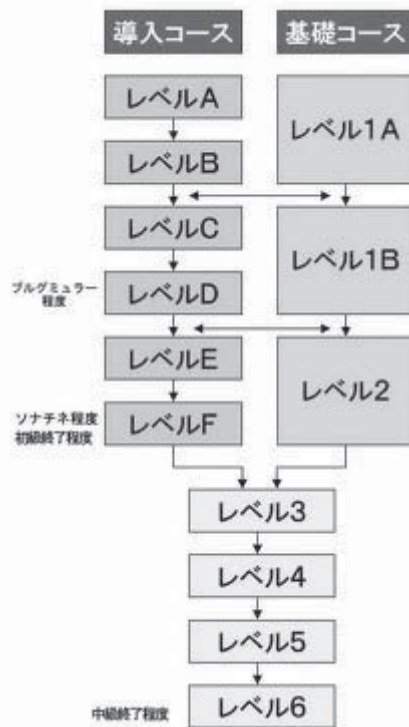


図5. アルフレッド・ピアノライブラリーの履修系統

10

新しい手の位置

この曲を弾きはじめる前に、まず上に示された位置に両手を置きましょう。  
2, 3回片手ずつで弾き、ハ長調 (C dur) での5本の指の位置の感じをつかんでください。

ピアノのくに

M.M. ♩ = 60-120

第1フレーズ

おい で よ き み も

第2フレーズ

ピ ア ノ の く に

★ フレーズ (楽句) ★

音楽はことばです。音楽は考えを表現したり、物語(もちろん音楽の)を語りたりすることができます。私たちはお話をきく時、1つ1つのことばとしてではなく文章の流れとして聞いています。これは音楽の場合でも同様です。1つ1つの音符は、それだけでは何の意味もありません。いくつかの音楽が、音楽の文章の影にならべられた時、はじめてある意味をもつことができます。音楽の文章のことをフレーズと呼びます。このページの小さな音楽的な物語が、2つのフレーズで話されていることに注意しながら、あなたの音楽も、フレーズがつながったものとして考えることを勉強してください。

図4. トンプソン現代ピアノ教本1 p.10より

30

ホ短調(ト長調の平行調)

ホ短調は、ト長調の平行調です。  
両方とも同じ調号(シャープ1つ、ファ♯)です。  
思い出しましょう: 平行調の短調は、長調の音階の第6番目から始まります。

ト長調の音階

1番目 2番目 3番目 4番目 5番目 6番目

ホ短調の音階

1番目 2番目 3番目 4番目 5番目 6番目 7番目 8番目

3つの短調の練習: まず右手で書いてある高さで弾き、次に左手を2オクターブ下で弾きましょう。

1. 自然的短音階: 平行調のト長調と同じ音だけを使います。

右手 1 2 3 1, 2 3 4 5, 5 4 3 2, 1 3 2 1  
左手 5 4 3 2, 1 3 2 1, 1 2 3 1, 2 3 4 5

2. 和声的短音階: 上行も下行も7番目(シ)の音を半音上げます。

右手 1 2 3 1, 2 3 4 5, 5 4 3 2, 1 3 2 1  
左手 5 4 3 2, 1 3 2 1, 1 2 3 1, 2 3 4 5

3. 旋律的短音階: 上行は、6番目(ト)と7番目(シ)の音を半音上げ(ト♯, シ)ます。下行は、自然的短音階と同じです。

右手 1 2 3 1, 2 3 4 5, 5 4 3 2, 1 3 2 1  
左手 5 4 3 1, 2 3 4 5, 5 4 3 2, 1 3 2 1

ホ短調和声的音階の反進行

毎日何回か弾きましょう!

mf

1 2 3 1, 2 3 4 5, 5 4 3 2, 1 3 2 1  
1 2 3 1, 2 3 4 5, 5 4 3 2, 1 3 2 1

ホ短調自然的や旋律的も反進行で弾いてみましょう。

図6. アルフレッド・ピアノライブラリー 基礎コースレッスンブック レベル4 p.30より



38

### 付点8分音符

付点8分音符の長さは、8分音符と16分音符をタイで結んだ長さと同じです。

はつきり数えながら、弾きましょう！

数え方：1 ホト a etc.

上と下は、書き方が違っているだけで、まったく同じです。

数え方：1 ホト a etc.

### 勇者をたたえる歌

図7. アルフレッド・ピアノライブラリー 基礎コースレックスンブック レベル4 p.38より

#### (7) グローバー・ピアノ教本

グローバー・ピアノ教本はディビッド・カー・グローバー (David Carr Glover) とルイス・ギャロウ (Louise Garrow) によって書かれた教則本で、導入編とそれに関連する補助教材グローバー・ピアノ・ドリル・ブック〈導入編〉とグローバー・ピアノ・併用曲集〈導入編〉、そしてグローバー・ピアノ教本・VOL.1~6 とドリル・ブック、併用曲集VOL.1~6がある。この教本については、ホームページの「夏目先生のページ」の中から「グローバー・ピアノ教本の研究」と、ホームページ「ピアノレッスンヒント」よりまとめる。

この教本はアメリカで作られ、他の新しい教則本同様、総合学習を目的としている。バイエルのようにただ弾くだけではなく、楽典や、アクセントの意味や強弱の意味などの解説事項が細かく記載され、また和音伴奏が重視されている。この教本は、音階から導入される調と、音階の学習もなく導入される調がある。ハ長調、ト長調、ヘ長調、ニ長調は音階の説明があり、音階の練習曲を使って体系的に学習できるようになっているが、イ短調、ホ長調などほかの調は突然導入され、音階を使った曲がほとんど出てこないという欠点がある。また、6度までの音域の曲が多いため、

音階を理解しにくい曲が多いようである。ハ長調、ヘ長調、ト長調については、VOL.1で左手の伴奏の仕方や指のポジションなど細かく指導されている。しかし、他の調について説明されないうちに、VOL.1のp.20という最初の方で5度の音程内とは言え、移調の練習が出てくるのであるが、7つの全ての長調で弾くことを要求されている。これは、最初に使う教材としては難しいことではないだろうか。譜面の音符は大きく、小さい子どもにも見やすいものになっていて、最初からヘ音記号も出てくる。ただし、「ピアノレッスンヒント」というホームページによると年長者で楽譜はだいたい読めて少し弾ける程度ならVOL.3からでも始めていいようである。VOL.3でも譜面が大きいため譜読みがしやすく、楽典について触れてあり、ペダル奏法なども取り入れられていて初心者にも使いやすい内容になっている。また、1~2ページの曲が多く、練習の負担になりにくいと思われる。しかし、欠点として先ほども挙げたように音階が少ないことと、シリーズが細かく分かれているため、全部使うと高額になってしまうという、他の教則本と同じ問題が出てきてしまう。

ここまで日本で主に使われているであろう教則本を比較検討してきて、一長一短があることがわかった。例えば「バスティン・メソッド」は全ての調について系統立てて勉強することができるためできれば取り入れたいが、冊数が多いために主要な調だけでも抽出して使用することが出来ないか検討する必要がある。「トンプソン 現代ピアノ教本」は音楽的なことについて学ぶにはとても優れているが、各調について学びにくく、こちらも冊数が多いため短期大学でそのまま使用するには難しい。メトードローズは指くぐりの技術などが付きにくく、少ないレッスン時間で幼児曲を弾けるようにならないと本学の学生には適さない。

以上の7冊について楽譜の構成や内容について述べてきたが、ここからは、各教則本の1巻について、より詳しく分析するため、調性、強弱記号など曲想に関する記号の有無などを表にして比較する。

表 1. 調性についての比較

教本タイトル	ハ長調	ヘ長調	ト長調	ニ長調	イ長調	ホ長調	イ短調	変ロ長調	変ホ長調	変イ長調
バイエル・ピアノ教則本 (番号が振ってある 106 曲)	83 曲	8 曲	6 曲	2 曲	2 曲	1 曲	3 曲	1 曲		
バスティンピアノ ベーシックス ピアノ (ピアノのおけいこ) レベル 1 (曲名が記載されている 46 曲)	27 曲	7 曲	12 曲							
パーナム ピアノ テクニック導入書 (60 曲)	60 曲									
メトードローズ・ピアノ教則本 ピアノの一年生 (曲名が記載されている 48 曲)	29 曲	7 曲	10 曲					2 曲		
トンプソン 現代ピアノ教本 1 (曲名が記載されている 50 曲)	19 曲	6 曲	14 曲	4 曲	3 曲	1 曲		1 曲	1 曲	1 曲
アルフレッド・ピアノライブラリー基礎コースレッスンブック レベル 1A (曲名が記載されている 28 曲)	28 曲									
グローバー・ピアノ教本 VOL.1 (全 35 曲)	17 曲	10 曲	8 曲							

表 2. 強弱や曲想に関する記号の比較

教本タイトル	強弱	速さ	アクセント	スタッカート	曲想・ダイナミクス
バイエル・ピアノ教則本	58 曲	7 曲	29 曲	6 曲	6 曲
バスティンピアノ ベーシックス ピアノ (ピアノのおけいこ) レベル 1	1 曲目より全ての曲に出現している	1 曲目より全ての曲に出現している。また p.14 や p.20, p.32 に速度記号の解説がある	p.24 にアクセントの解説がある	p.12 にスタッカートの解説がある	最初の曲からスラーが出現する。クレッシェンド、ディミヌエンドの解説が p.32 にある
パーナム ピアノ テクニック導入書	全く出てこない	全く出てこない	55 曲目に 1 曲のみ	4 曲目より出現し、13 曲に付随	全く出てこない
メトードローズ・ピアノ教則本 (ピアノの一年生)	強弱は p.50 の第 6 課で詳しい解説があり、それ以降出現する	日本語で「ふつうのはやさで」など出現するが、ほとんど指示はない	p.37 に最初に書かれ、そのあと 5 曲に出現する	全く出てこない	「やさしく」「陽気に」などの曲想が全ての曲に書かれ、第 6 課よりダイナミクスが出現する
トンプソン 現代ピアノ教本 1	16 曲	5 曲	22 曲	7 曲	
アルフレッド・ピアノライブラリー基礎コースレッスンブック レベル 1A	p.16 にフォルテとピアノの解説がある。	p.39 より日本語で「ゆっくり」などの指示が出現する	出てこない	p.62 にスタッカートの弾き方について解説される	p.39 にスラーの弾き方、p.63 にクレッシェンドの解説がなされる
グローバー・ピアノ教本 VOL.1	p.5 にフォルテとピアノの説明があり、1 曲目から出現する	2 曲目よりイタリア語と日本語で出現する	10 曲	4 曲	p.33 にクレッシェンドとディミヌエンドの解説があり、その後出現する



## (8) 総括

このように表にして比較すると、バイエル・ピアノ教則本はそれぞれの分析において偏りはあるが広い分野にわたって学習できることがわかる。調に関していうと、トンプソンのピアノ教本が多彩な調で書かれていることがわかる。これは1巻だけ使用したとしても勉強はしやすいであろう。バーナムは移調のことを勉強することが前提となっているためすべてハ長調で書かれている。バスティン・メソードは系統立てて全調を勉強することになっているため1巻だけの使用は難しい。グローバー・ピアノ教本も同じである。メトードローズは1冊で学習できることになっているが、表出する調が少ない。

バーナムは、指の運動とまえがきでいっていることから、強弱や曲想、速さといったことは全く出てこず、音楽的なピアノ奏法を身につけさせたい我が短期大学のピアノの目標としては適さないテキストであることがわかった。バスティン・メソードやグローバー・ピアノ教本の良いところを抽出して短大用の教則本を作ることができれば、音楽的な感性から、調に関する理論、様々な音楽記号に対する知識など付けることができるかもしれない。このように比較することで、各教則本にそれぞれに一長一短があることがよくわかる。

次に、教則本の併用曲集として出版されている曲集を比較する。

## 4. 教則本併用曲集について

タイトルからも分かるように、教則本併用曲集というのは、バイエルなどの教則本を用いながら曲集としても一冊併用して使用する作品集で、多く出版されている。しかし、その多くが「バイエル併用曲集」となっていることに注目すべきである。これこそ、バイエルが基準となっていることがひと目で分かるタイトルである。ピアノ指導者もバイエル何番程度と言われるだけで、そのピアノの生徒がだいたいどのくらいの程度か分かってしまう。その教則本併用曲集について一つずつ見ていく。

### (1) グルリット 初歩者のための小練習曲

作曲者のコルネリウス・グルリット (Cornelius Gurlitt 1820-1901) は主として子ども用のピアノ教本を中心にたくさん作品を残している。年代的にロマン派時代の様式も覗かせつつ、古典主義的な中で曲を作っていると言える。機械的なメカニズムを避けるような曲調で、旋律的に楽しさを表面に出して、その楽しさで弾いているうちに知らず知らずの間にテクニックも身につくようにするという考えの基、作られている。

この曲集の解説を千蔵八郎が書いているが、「程度から

いえば、まったくのバイエル併用と考えていいでしょう」<sup>3)</sup>と記載している。千蔵によると、バイエルでの学習を補うような意味で、最初から順にやって、バイエルで身につけた能力をいっそう確かな物にするという方向で使ってみるといいだろうと記載されている。もしくは、他の副教材があれば、バイエルにはあまり出てこないようなタイプの曲を抜粋してさせてみるのも1つの方法だと思いと記載している。この曲集もバイエルと同じく、No.23までは両手ともト音記号である。No.24よりヘ音記号が出てくるが、No.29までは両手とも同じ動きをする曲がほとんどである。もし使用させるのであれば、No.30以降の曲を学生のレベルに合わせて抜粋し、ただの指の運動ではない、旋律的なメロディーが多く出てくるこれらの曲を弾かせることは学生のためになるかもしれない。曲数的にもNo.54までと短く、1年間かければ終わる曲数であろう。No.29まではハ長調で、ハ長調は41曲登場するNo.30はイ短調、No.31、32はト長調で他に2曲。No.38番よりヘ長調が登場し、全部で6曲のヘ長調の曲が登場する。そして、ニ長調が2曲あり、変ハ長調や変ロ長調は登場しない。

### (2) バイエル併用 ピアノのお友だち 新訂①

次に千蔵八郎が編集した「バイエル併用 ピアノのお友だち 新訂①」である。この曲集もバイエル併用と記載されているように、3巻あるうちの1巻はバイエルと併用して弾けるようになっている。この曲集は、ケーラーやグルリット、ツェルニー、ディアベリ、バッハなど有名な作曲家の曲を集めた曲集であり、最初の10曲は左手がト音記号となっている。全ての曲に曲名が付いており、曲のイメージがしやすくなっている。

千蔵によると、第1巻と第2巻では、基礎的な勉強ができるように、メロディックな教材を中心に選曲し、第3巻では、その第1、2巻と併用できるようなエチュード集ということで、練習曲的な教材を中心に編集しているということである。この曲集の1巻の半分以上を過ぎると、現在本学で行っているレッスンの中でバイエルが終了はしたが、ブルグミュラーやソナチネに進むことができないピアノを苦手とする学生たちに対して先生方が選曲される曲が多く入ってくる。その学生たちはそういった簡単な曲でも苦勞している。このことから、バイエル併用といいつつも、バイエルより少し難しめの曲が入っていることが分かる。どちらかという、バイエルを終了したが、ピアノが苦手なソナチネに入ることが難しい学生を対象に購入させると良い教材かもしれない。この曲集はハ長調が64曲中38曲、ト長調が16曲、ヘ長調が5曲、その他ニ長調、イ長調、変ハ長調の曲がある。31曲目までは両手ともト音記号である。

### (3) リトルコスモス

「リトルコスモス」という曲集であるが、こちらも「バイエルを学びながら音楽性が育つ易しいピアノ曲集」というタイトルが付いている。この曲集は1983年に成田稔子によって編集されているが、成田によると「はじめに」の部分に「例えばバイエル・ピアノ教則本は、たいへん系統的かつ論理的に、西洋音楽のもつ基本的な様式感や機能と声指のメカニズム習得とともに、段階的に身につくように考えられた、優れたメソッドであります。しかし、これらピアノ入門教則本の多くは、ピアノを弾くための物理的な指のメカニズム習得を第一主義とするあまり、そのひとつひとつの曲は、曲というよりはむしろ、メカニズム習得用素材に近く、音楽的感興を湧き起こすような物は少ないということもまた、周知のことといえるでしょう。

これらによるだけでは、音楽的表現は欠落し、深い音楽性への芽吹きは育ちにくいといわざるを得ません。また具象のイメージから、逐次、抽象的なイメージに導かれていかなければならない音楽の本質的な抽象性の把握も生まれはきません<sup>4)</sup>とバイエルを無機質な指の練習曲と批判している。この「リトルコスモス」はバイエルなどの入門教則本を習っている段階の子どもたちが、自らのみずみずしい音楽性を失うことなく、音楽表現するために編集しているということである。特にロシア曲をメインに取り入れた曲集であり、フランス民謡やハイドンといった子どもたちも聴いたことがあるような曲をバイエル何番程度という区分けで併用しやすいように編集されている。また1曲目から強弱、曲想、アゴーギクなどが取り入れてあり、表情豊かに演奏するよう工夫されている。音符も大きめに書かれているため、難しさを感じにくく、学生に使用させた場合、取り組みやすい内容になっていると考えられる。64曲ある中で、1番から24番まではハ長調の曲である。イ短調が21曲、ト長調が7曲、ヘ長調が5曲、ニ長調、イ長調や変ホ長調が数曲ずつでくる。イ短調が多いのは、ロシアの曲をメインに取り入れられているからだと考えられる。

### (4) わたしはピアニスト

最後に「わたしはピアニスト」という曲集であるが、こちらも「楽しく学べるバイエル併用曲集」という題が付いている。まえがきで編曲者の田中雅明は「わが国で、いちばん多く使われているバイエル・ピアノ教則本は、ピアノの基礎を勉強するのにたいへんすぐれていると思いますが、バイエルの不足を補う意味で、この曲集はピアノを楽しく学びながら、音楽的にも技術的にも進歩することを目的としています<sup>5)</sup>と記載しているように、やはりバイエルだけでは音楽性が身につかないと考えているようである。この曲集の特徴は、「ジングルベル」「ぶんぶんぶん」「ちょ

うちょう」「どんぐりころころ」「たき火」「雪」といった、幼児曲としても歌われている曲が音楽的に簡易に編曲された楽譜が載っているところである。現在、鹿児島県全域の保育所・幼稚園で使用されている「うたとあそび」に載っているこれらの曲は、難しい伴奏が多い。このような曲は筆者が編曲をし、ほとんど3和音を使った単純な楽譜にして、学生たちに簡易伴奏譜として渡している。これを音楽的に弾くように編曲されていることは、学生にとっても使いやすい曲集ではないかと考えられる。57曲中、42番まではハ長調で43番よりト長調が初めて出てくる。その後もハ長調が4曲出てくるため、46曲はハ長調、2曲がイ短調、6曲がト長調、ヘ長調は1曲しか出てこない。この楽譜にもバイエルと連動しているためか、ハ長調が多く、他の調の曲が少ない。「うたとあそび」と「わたしはピアニスト」に共通する曲で、原調が変ホ長調やヘ長調であっても、「わたしはピアニスト」ではハ長調に編曲されている曲が多いため、もし使用するならば、原調に戻した上で簡易伴奏として使用したいものである。

### (5) 総括

今回教則本併用曲集として4冊だけ取り上げたが、バイエル併用曲集と名の付く楽譜は数え切れないほど出版されている。多くの曲集が、クラシックの名曲をバイエル程度に編曲したものや、童謡、アニメの曲などをバイエル程度に編曲したものなど多種多様なものが出版されている。グルリットの曲集は、まえがきを見るまではバイエルの併用曲集ではなく、教則本として分析するつもりであったが、千歳のまえがきを読んで併用曲集に分類するに至った。これだけバイエルが楽譜の基準になっているのであれば、バイエルから完全に抜け出すことは難しいことであろう。なぜ日本でここまでバイエルが基準となったのかということは、やはり最初にピアノというものが日本に入ってきたときに、爆発的に売れた教則本がバイエルだったからに他ならないだろう。他の教則本がほとんどない時代に、先にも述べたように4人の音楽教育者がバイエル・ピアノ教則本に手を加え、それが全国に広まり、長年使われてきたからとしか考えられない。ただし、どのまえがきにも書いてるように、バイエルは完璧なものではなく、機械的な指の運動には良いが、音楽性を身につけるまでには至らないようである。このことを補う併用曲集を使うことができれば、音楽性を養うことができるのではないだろうか。

ただ、本学に於いて学生のピアノのレッスン時間は一人8分程度である。バイエル・ピアノ教則本と幼児曲を1曲ずつ弾かせるだけで精一杯である。できるだけたくさん幼児曲を弾かせたいと思っているが、2年間で40曲程度しか弾かせることができないのが現状である。併用曲集は、

1年次には採用することが難しく、2年次にバイエル修了後にクラシック曲を自由選択する際に、ソナチネなどに行くにはレベル的に難しい学生に与える方が適しているであろう。

## 5. 考察

バイエル・ピアノ教則本を始め、他の教則本や併用曲集を比較して、決してバイエル・ピアノ教則本が悪いわけではなく、むしろ様々なことを網羅しており、多くのことを系統的に学ぶことが分かった。しかし、やはり現在使用している「ピアノテキスト」にバイエルが抜粋されていることもあり、同じ曲が載っている楽譜を学生に買わせることに抵抗があることは否めない。ただし、多くの教則本が冊数が多く、全てを使用することが難しいことはこれまでに何度も述べたとおりである。そこで、本学の学生がピアノの技術を伸ばし、最終の目的として幼児曲を子どもたちの前で楽しく弾くことができるよう、また難しい楽譜を簡易伴奏にする技術が身に付くよう、そして子どもにとって音が高いと思ったときに移調することができるような技術が身に付くことができるように、これまで比較した教材から抜粋して本学用のテキストを作成することが最も良い方法ではないかと考えた。多くのテキストの良いところがそれぞれにあることがわかったからである。

今後の課題としては、どのような観点でテキストから抜粋するかについて考察することである。例えば、どの調まで掲載すべきかということは、鹿児島県私立幼稚園協会が出版している「うたとあそび」を基準に検討することができる。フラットとシャープが3つまで（ハ長調、ト長調、ヘ長調、変ロ長調、ニ長調、変ホ長調、イ長調）を知っていればだいたいどの曲でも弾けるため、そのスケールと主要3和音の強化、そして移調の方法などバスティンメソッドから抜粋することができるであろう。そして、掲載する曲については次のように検討できる。例えば教則本併用曲集には「ちょうちょう」や「たき火」などの簡易伴奏での曲が載っているものがあつた。このような、「うたとあそび」をそのまま弾くと難しい曲で、よく幼稚園や保育所で使われるであろう曲の簡易伴奏版を掲載することが望ましいであろう。また、ピアノの先生方がよくバイエル修了者に課題曲として出されるディアベリやバッハといった作曲家の簡単なクラシック曲も掲載していると教員が毎回学生のために選曲する手間が省ける。このように、系統立てて学習できる方法を今後模索し、本学独自の楽譜としてまとめたい。

## 引用文献

- 1) エドナ・メイ・バーナム著・大島正泰監修・中村菊子解説、訳 (1975)「バーナム ピアノ テクニック導入書」株式会社全音楽譜出版社 まえがき
- 2) ジョン・トンプソン編 大島正泰訳 (1972)「トンプソン 現代ピアノ教本」株式会社全音楽譜出版社 まえがき
- 3) グルリット「初歩者のための小練習曲」株式会社全音楽譜出版社 この曲集について
- 4) 成田稔子編 (1983)「バイエルを学びながら音楽性が育つやさしいピアノ曲集 リトルコスモス」株式会社全音楽譜出版社 はじめに
- 5) 田中雅明編・入野義朗監修 (1974)「楽しく学べるバイエル 併用曲集 わたしはピアニスト1」株式会社全音楽譜出版社 まえがき

## 参考文献

- ・青山雅哉 (2009)「ピアノ教則本の特徴 I～バイエル・ピアノ教則本について～」奈良文化女子短期大学紀要第40号 pp.1-8
- ・浅見英夫 (1979)「バスティーンピアノメソッドについて」東京家政大学研究紀要第19集 pp.19-29
- ・小倉郁子 (2001)「バスティンメソッドから得た音楽教育観」宇都宮短期大学研究紀要第8号 pp.55-65
- ・久保田眞子・古庵晶子 (2013)「保育者養成におけるピアノ教則本のあり方について—コード奏習得を中心とした場合—」白鳳女子短期大学研究紀要第8号 pp.59-75
- ・重永洋子 (1995)「バスティン・メソッドによる一学習者の音楽的成長」長崎県立女子短期大学第43号 pp.137-141
- ・重永洋子 (1995)「ピアノ教育におけるバスティン・メソッドの有効性」長崎県立女子短期大学第43号 pp.143-150
- ・多田純一 (2010)「日本における『バイエル・ピアノ教則本』の需要と変遷」音楽教育史研究第13巻 pp.53-68
- ・田中巳穂・村澤由利子 (2010)「バスティン・ピアノメソッドに見られるラーニング・スパイラルに関する一考察」鳴門教育大学実技教育研究20 pp.11-20
- ・徳富聖子・安原雅之 (2004)「ピアノ教則本の比較研究に向けて」山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要第18号 pp.75-86
- ・前田美樹 (2012)「『子どもの歌』ピアノ指導法 I—『バイエル・ピアノ教則本』と『メトードローズピアノ教則本』の比較から—」青森中央短期大学研究紀要第25号 pp.41-51
- ・宮脇長谷子 (2001)「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」静岡県立短期大学部研究紀要第15号 pp.1-11
- ・三好優美子 (2010)「バイエル・ピアノ教則本 抜粋テキストにおける編纂についての調査報告」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第45号 pp.181-190
- ・安田寛 (2012)「バイエルの謎 日本文化になったピアノ教則本」音楽之友社

### 参照ホームページ

- ・ ヨシダ楽器ホームページ  
<http://www.yoshida-gakki.jp/%E6%A5%BD%E8%AD%9C/alfred/>
- ・ 夏目先生のページ  
[http://www.avis.ne.jp/~natsume/msc\\_index.html](http://www.avis.ne.jp/~natsume/msc_index.html)
- ・ ピアノレッスンヒント  
<http://piano-advance.com/index.html>

### 参考楽譜

- ・ フェルディナント・バイエル著 (1915) 「バイエル・ピアノ教則本」音楽之友社
- ・ ジェーンバステイン, ジェームス・バステイン著 (1960) 「バステインピアノ ベーシックス ピアノ (ピアノのおけいこ) レベル1」株式会社 東音企画
- ・ エドナ・メイ・バーナム著・大島正泰監修・中村菊子解説, 訳 (1975) 「バーナム ピアノ テクニック (導入書)」株式会社全音楽譜出版社
- ・ エルネスト・ヴァン・ド・ヴェルド著・安川加寿子訳編 (1951) 「メトードローズ・ピアノ教則本 ピアノの一年生」音楽之友社
- ・ ジョン＝トンプソン編著・大島正泰訳 (1972) 「トンプソン現代ピアノ教本1」株式会社全音楽譜出版社
- ・ W.A.パーマー／M.マニユス／A.V.レスコ編著・田村智子訳 (1998) 「アルフレッド・ピアノライブラリー 基礎コースレッスンブック レベル1A, 1B」株式会社全音楽譜出版社
- ・ デイビッド・カー・グローバー／ルイス・ギャロウ共著 (1979) 株式会社ヤマハミュージックパブリッシング
- ・ グルリッド著・千蔵八郎訳「グルリッド 初歩者のための小練習曲」株式会社全音楽譜出版社
- ・ 千蔵八郎編「バイエル併用 ピアノのお友だち新訂1」株式会社全音楽譜出版社
- ・ 成田稔子編 (1983) 「バイエルを学びながら音楽性が育つやさしいピアノ曲集 リトルコスモス」株式会社全音楽譜出版社
- ・ 田中雅明編・入野義朗監修 (1974) 「楽しく学べるバイエル併用曲集 わたしはピアニスト」株式会社全音楽譜出版社

(2014年12月3日 受理)